

牛の主な品種 (社)日本食肉協議会「世界家畜図鑑」より

■ 黒毛和種 (Japanese Black)

黒毛和種は、古くは中国、近畿地方を主産地とする役肉用牛であったが、現在では全国に広く分布する、わが国肉用種の主流である。

和牛の他の品種に比較して体がよくしまり、四肢強健であるが、体の幅や後躯に充実を欠くことが欠点とされている。毛色は黒毛ではあるが、毛先は褐色を帯び黒褐色に見える。平均的に脂肪交雑、肉の色沢、肉のきめ及び締まりなどの肉質形質に優れた遺伝的特性をもっている。肉量においても、販売可能な正肉の歩留において優れている。脂肪に関係した特徴においても、その分配、分布のパターンに独特のものがあるようであり、肉のうま味と関連していると考えられるクリーム色を帯びたねばりのある脂肪を蓄積する。「神戸ビーフ」「松坂牛」「近江牛」などのブランド名で売られる最高級の牛肉を主として生産する「但馬牛」は、黒毛和種の中でも特異な系統である。このような肉質形質における優れた遺伝子がどこから由来したかは興味のもたれる点であるが、古くから飼われてきた在来の和牛の伝えてきた能力である可能性が強く、これは朝鮮半島及びアジア大陸北部に起源をもつ品種とも共通していると想像される。

■ 褐毛和種 (Japanese Brown)

熊本系の褐色和種は主産地の熊本県を初め、静岡県、宮城県、秋田県、北海道などに分布している肉用種である。

明治時代に熊本県下に飼われてきた和牛に、デボンの雄が交雑され、1907年以降はシンメンタールの雄に切り換えて交雑が進められ、それらの交雑種から選抜して「肥後牛」の基礎が固められたものである。

体格は黒毛和種や褐毛和種の高知系の牛よりも大型を目標にしている。体積及び発育には優れたものを持ち、性質が温順で役用能力も優れていたため、かつては関東及び東北地方の畑作地域でかなり飼育されていた。毛色は一毛で、一般に黄褐色ないし赤褐色で高知系よりうすいものが多い。

能力面では、増体能力や飼料の利用性に見るべきものがあるが、産肉能力の中で重視されている脂肪交雑形質やその他の肉質形質において黒毛和種に比較すれば劣る点があると考えられ、肉市場での評価はあまり高くない。

高知系の褐色和種は、毛色によって品種区分が行われたために熊本系と共に褐毛和種として認定されたが、本系統の成立過程は、熊本系とかなり異なっている。その特徴は韓牛の影響が強く、かつては「改良韓国(朝鮮)種」と呼ばれたことがある点である。

体格は黒毛和種と同じ程度のもを標準としており、一般に体積豊かで、発育はよいが、体躯がゆるみなものが多い。肉質面でも脂肪交雑形質において優れた雄牛が作出されている。又、重要な形質の一つであるロース芯面積においてもすばらしい結果が出されている。

■ 無角和種 (Japanese Polled)

無角和種の作出は、元農林省畜産試験場中国市場にスコットランドからアバディーン・アンガスの雄が導入され、これを和牛と交配して得た雑種雄が1920年に山口県阿武郡に貸与されたことが発端となっている。その後更に同品種の雄を導入し、アバディーン・アンガスの特徴である無角性や肉用牛体型をそなえた「無角防長種」の造成が図られ、1944年に和牛の一品種と認められるに至った。

体格はほぼ黒毛和種と同じ目標が設定されているが、体重の標準値はやや大きい。毛色は黒毛和種より濃い黒色で無角である。

能力面では、アバディーン・アンガス同様早熟で、飼料の利用性に優れたものをもって。又、増体能力も優れている。肉用牛らしい体型が評価され和牛の中の優等生的存在として期待を集めたが、肉市場において脂肪交雑や肉のきめに関して劣る点があること、枝肉が厚脂気味となることなどを理由にあまり高い評価が得られず衰退した。

■ 日本短角種 (Japanese Shorthorn)

わが国にショートホーンが導入されたのは1871年ころといわれているが、乳用及び肉用のショートホーン雄が混用された。本種は和牛の他の3品種と異なり乳肉兼用種として改良していくことが考えられた時期があり、結局飼育目的を肉用にしばってきた経緯がある。又、固定した品種と認められたのも1957年で、飼育地域全域で統一した改良に着手した時期が遅い。従って和牛の中では一番若い品種である。

体格は和牛としては比較的大型なサイズを標準としている。毛色は濃淡様々の褐色で体下部に白斑のあるものも多い。又、褐及び白色の毛が混じって生える粕毛のものもいる。肉用種としての能力で特に注目されるのは放牧能力に優れており、粗飼料の利用性が優れている。産肉能力に関しては増体の点では優れているが、肉のきめがあらく、脂肪交雑形質では黒毛和種より劣るといわれる。又、皮下及び体腔内や内臓への脂肪蓄積が多いことも肉市場における評価が低い理由とされている。しかし、東北地方の放牧形式による肉牛生産に向く牛として、生産地の愛好は強いものがある。

■ アンガス (Angus)

イギリスの北スコットランドを原産地とする肉用種の3大ブリティッシュ・ブリードの一つである。無角の土産牛から発し、1830年ころから育種家ウィリアム・マックコムビルがアンガス州とアバディーン州の2つの系統を計画的に交配することによって本品種の素地を築いたといわれている。

体格は小格ないし中等で、体型は肉付厚く豊円で、全体の輪郭は丸味を帯び、「地低く」で典型的な肉牛型である。毛色は黒毛で、無角であることが大きな特徴である。褐毛の遺伝子も存在するために毛色の褐色のものはレッド・アンガスとして別品種に分けられている。無角の遺伝子を利用して、集団飼育に適した新品种の造成に使われることもあった。能力面では、体成熟、性成熟の両面において早熟であり、外国種の中では肉質特に脂肪交雑形質に優れており、厳しい自然環境の北スコットランド原産であるため粗飼料の利用性に優れた特徴があり、いわゆる「草に乗りやすい牛」と評価されている。泌乳能力も肉用種としては良好であるが、性質がやや神経質で管理上注意を要する点がある。

本品種はアメリカを初め世界の各地に分布しているが、わが国にも1916年に導入され無角和種の造成に貢献している。

■ ヘレフォード (Hereford)

肉用種の3大ブリティッシュ・ブリードの一つで、イングランド西南部のヘレフォード州が原産地である。由来は定かではないがこの地域で数百年も前から飼われていた在来牛を18世紀から肉用種として改良し、熟性をは早め、1846年から登録が開始された歴史の古い品種である。

体格は肉用種としては大きい方であるが、牛全体から見れば中型に入る。顔は四角で全体に幅があり、骨太で頑強そのものの体付きをしている。毛色は体上部が頸、肩を除き濃い赤褐色で、体下部や尾房が白いことがこの品種の特徴である。又、優性の白頭遺伝子をもつために頭部が白く、その特徴は交雑した子牛にも明確に現われる。

産肉能力においては、増体も比較的速く、赤肉の量も多いが、早熟になりすぎたためか厚い皮下脂肪がつきやすく、肉のきめがやや粗い。脂肪交雑形質については外国における要求水準は満たせるが、比較的低い方である。この品種が世界各地に広がり、大きな飼養頭数を維持しているのは、非常に強健で、厚さ、寒さ、乾燥などの苛酷な自然条件によく適応し、粗悪な飼料に耐えるためである。また、鈍重ともみえるほど性質も温和である。

■ シャロレー (Charolais)

フランス中部の高原地帯に西暦前ローマ人が侵攻したときに持ちこんだという在来種を役用に改良し、後これが肉用種に転じた。重粘な土壌を耕すためには大型の力の強い役牛が必要であったことと、フランスでは牛肉としてほとんど脂肪を除去することなどから、このような需要に適した筋肉質で肉脂率の優れた品種が作出されたと考えられる。

体格は大型で、体の幅や伸びに富む堂々とした体積の牛である。尻は傾斜し丸尻となっているが腿はよく充実している。毛色は乳白単色で、鼻鏡や蹄は黒い。有角の品種である。産肉能力では増体速度が大きく、脂肪の少ない枝肉を生産する。いわゆる赤肉タイプの牛である。

わが国にも1960年に導入され、和牛やホルスタインとの交雑に用いられたが、食肉市場の要求する肉質に適さず、次第に衰退した。

■ ホルスタイン (Holstein)

ヨーロッパの各地に広く分布する黒白斑牛が乳肉兼用の品種として成立したのはオランダのフリースランドである。ところが、アメリカにこの種の牛が初めて輸入されたのはドイツのホルスタイン地方からであって、これを基に乳専用種としての改良が開始され、アメリカでの呼び名は「ホルスタイン」が使われた。わが国へは原産地のヨーロッパからよりも、北アメリカ大陸から乳用種として改良されたものが導入されたので「ホルスタイン」の名が一般的に使われている。

ホルスタインは約2000年以上前にドイツからオランダへの移住民が伴った牛が基になっている最も歴史の古い品種である。

この品種の長い歴史と広範囲に及ぶ分布が原因となって体格や体型上の特徴は各国えかなり異なっている。ヨーロッパに飼われている牛は大体中型で乳肉兼用種としての特徴を示しているが、北アメリカ大陸に入りアメリカやカナダで乳専用種として改良されたものは、大型で乳用種の特徴であるくさび型の体型をしている。当然わが国で飼われているホルスタインもこの系列に入る。

能力上の特徴は簡単に表現すれば乳量が多く、乳脂率が低いことである。最近重要視されている搾乳性の点でも搾乳速度が大きく、全般的に乳用牛としての性能が優れている。外観上の品種特性は黒白斑あるいは白黒斑であり、優性白斑の遺伝子があるために体下部、四肢の下部、尾房の先端などが白になる。一般に有角で、管理上除角するが多いが、イギリスでは遺伝的に無角のものが作られている。